医療先進県を狙うその意図は

グローカルインタビュー

神奈川県知事

黒岩 祐治 氏

くろいわ・ゆうじ　1954年神戸市生まれ。80年早大政経卒、フジテレビジョン入社。「FNNスーパータイム」や「報道2001」のキャスターを務め、救急医療キャンペーンなどで民間放送連盟賞を受賞。2009年に退社し、国際医療福祉大学大学院教授を務める。11年４月に神奈川県知事に就任し、現在は１期目。「いのち輝くマグネット神奈川」を政策に掲げる。趣味は歌、ミュージカル、ダイビング。座右の銘は「愚直」。

縦割りを超えたモデル狙う「未病」段階から全県で啓発

神奈川県が健康寿命を延ばし、元気で長生きできる社会を目指す「ヘルスケア・ニューフロンティア」という取り組みを進めている。今春には担当局を設置。生命科学分野と生活支援ロボットなどの特区を活用して新たな産業創出にもつなげようとしている。「未病」という東洋医学的な発想を採り入れたのが特徴だ。約910万人の人口を抱える神奈川は老年人口の割合が約22％と全国の都道府県で３番目に小さいが、今後急速な高齢化が予想される。黒岩祐治知事に取り組みの狙いを聞いた。

Q 「ヘルスケア・ニューフロンティア」という新たなプロジェクトを始め、担当部局も設置した。一般的には聞き慣れない言葉だが、プロジェクトの中身とその背景は。

A 神奈川の人口の将来像をみると、1970年代にはきれいなピラミッド型だったものが、2050年には逆向きになって85歳以上の高齢者が最も多くなる。人類が経験したことのないような超高齢社会が到来するのだ。もちろん日本ならびに先進国全体の課題ではあるが、神奈川は高齢化のスピードが早い。なんとかしなければという切実な思いがある。“課題先進県”として解決し、乗り越えるためのモデルを作らないといけない。そこで４月に「ヘルスケア・ニューフロンティア推進局」（理事以下33人体制）を庁内に設置した。

２つのアプローチで進める。１つは最先端医療と最新技術の追求だ。再生医療やiPS細胞、生活支援・介護ロボットのように世界をリードする基礎研究を実用化する。医療の高度な情報化も必要で、神奈川ではお薬手帳の電子化である「マイカルテ」から始める。その中心となるのが国から特区の指定を受けた「京浜臨海部ライフイノベーション国際戦略総合特区」と県央部の「さがみロボット産業特区」だ。もう１つが、「未病を治す」というアプローチ。東洋医学の考え方が入っていて、いつまでも健康であるために「医食農同源」と日常的な運動習慣をつけることなどだ。この２つのアプローチを融合して、健康寿命の日本一を目指す。健康であれば高齢になっても何も問題は

禁複製・無断転載

ない。さらにそこには産業が生まれるだろう。未病産業の創出だ。これで神奈川の経済のエンジンを回す。この考え方を具体化するために国の国家戦略特区にも手を挙げ、県全域が認められた。高齢化が進めば、単に病気を治しているだけでは間に合わなくなるだろう。2014年度は（がんワクチンセンターの設置運営や再生医療の推進事業、生活支援ロボット開発支援機器の整備、漢方サポートセンターの運営など）ヘルスケア・ニューフロンティアの推進に約11億円の予算を付けた。

Q なぜ県の施策に東洋医学的な発想を採り入れたのか。「未病」という言葉が分かりにくいという声もあるが。

A 「年をとれば病気になって介護が必要になるのは仕方がない」ということにしていては、超高齢化を乗り越えられないだろう。確かに日本の国民皆保険制度は世界に冠たる素晴らしい制度であるし、日本の医療は世界でも最高水準だが、いまのままでは絶対に継続できない。医療機関に患者が殺到して診療機能を維持することは不可能になる。病気にならなくすることに真剣に取り組まなければいけない。予防に力を入れるという考えがある。概念としては非常に大事だが、それは病気と健康を対立的な概念で捉えている。ただ、老人をみてみれば様々な病気を同時に抱えていて、２つの対立する概念だけでは解決できない。そこで未病という東洋医学の考え方が重要になる。病気と健康の間にある連続的な変化、グラデーションの状態を指す。その意味でいえば、老人は大半が未病にあたるだろう。

医食同源という言葉があるが、これは薬と食は源は同じという意味で、病気になって薬を使うのではなくて、食の力で少しでも健康な方にもっていこうということだ。「身土不二（しんどふじ）」という自分の生活している環境のすぐ近くのものを食べると体にいいという、地産地消的な発想もいれて「医食農同源」と私は言っている。体験的に知っていることを科学の目を入れて機能や効能を分析し、皆で共有していく。

県央部のさがみロボット産業特区では、生活支援ロボットの実証実験が進められている（視聴覚障がい者をサポートするロボットの実験の様子）

科学的な分析ではいろいろな新しい技術が出てきた。ウエアラブル（身につける）機器で何歩歩いたか、睡眠の状態など体のなかの情報を蓄積したり、声の分析でうつの状態が分かったりするような機器がある。最先端の機器を活用して生活パターンをモニタリングしながら未病を「見える化」していく。こうした機器を完備した家や街を将来的にはイメージしているが、そこに至るまでは動機づけをしていきたいと考えている。

今年１月に「未病を治すかながわ宣言」を出し、食や運動、社会参加の取り組みに賛同・協力してもらえる店舗を募っている。「未病って何のことだろう」という人に対し、概念を一般的にどんどん広げる狙いだ。いい食生活や運動をした人にポイントを付与して、それがたまると協力店での値引きが受けられるといった仕組みも実施していく。あわせて組織にも訴えかけていく。CHO（チーフ・ヘルスケア・オフィサー）構想という取り組みで、企業や団体にCHOというポジションを設けて、その構成員を未病を治す方向に持って行こうというものだ。知事部局で8000人弱の神奈川県庁では、私がCHOになった。CHO同士がお互いの取り組みの成果などを共有していければと考えている。地域、組織の両面の取り組みで、マスを動かしていきたい。

Q 医療関係者はどう評価しているのか。特に反対などは出ていないか。

A ヘルスケア・ニューフロンティアの構想は海外でも注目されている。訪米してこの構

禁複製・無断転載

「ヘルスケア・ニューフロンティア」では、最先端の医療と東洋医学の考え方を融合する（横浜市立大学でのiPS細胞の研究の様子）

想の話をしたところ、非常によく理解してもらった。メリーランド州やマサチューセッツ州とは医療分野で大学や企業が協力する覚書を結んだ。特区の窓口である（県と企業で構成する）一般社団法人ライフイノベーション国際協働センター（GCC）はハーバード大の関係機関やジョンズホプキンス大と覚書を締結。米国の３大トップの大学病院関係者の心をつかんでいる。それに先だって昨年11月に訪問したシンガポールでも政府機関とGCCが覚書を結んだ。今年の秋に私は欧州を訪問する予定で、神奈川を中心として未病をカギとなるコンセプトとし、シンガポールなどアジア、米国、欧州がつながることになる。まずは神奈川のなかで早く進めていきたい。

国内の医療関係者からも「その考えはおかしい」というような反対の声は聞いたことがない。日本医師会の横倉義武会長からも「その構想は素晴らしい」と言って頂いている。今の国民皆保険の医療制度を守るためのものなので、抵抗が出るような話ではないのではないか。

Q 健康づくりは重要な問題だが、国・厚生労働省ではなく、県である神奈川がやる必要があるのだろうか。「健康寿命日本一」の成果が出るまでに時間がかかるのではないか。成果自身も定量的に見えにくいような感じを受けるが。

A 私は神奈川県知事として、県民の命をどう輝かせるかを最大の使命だと思っている。確かに本来は国がやるべきだろうが、今の統治機構では動かしにくいだろう。未病を治すといっても領域は厚労省や農林水産省など多岐にわたるからだ。県も部局には分かれているが、国の縦割りとは比べものにならない。部局の垣根を越える動かし方は県だからこそやれると思っている。さらに国家戦略特区に指定を受けた。900万人の人口がいる神奈川は一つの国のようなもので、国全体に広げられるようなモデルを作っていきたい。

意外に成果はそんなに見えにくい話ではないだろう。たとえば県の保健師を３市町に派遣して、食生活の改善などを図って生活習慣病の予防につなげる先導的なモデル事業を展開しているが、たちどころに成果を出している。この事業の担当職員の（健康面での）数値も改善しているくらいだ。未病を治すがブームになれば、食生活の見直しや運動習慣の継続などにつながって、それだけで日々、より健康な状態になるのではないか。私自身も毎朝５kmを走って、食事もコントロールし、すでに成果は出てきている。健康寿命というのは主観的な概念ではあるが、神奈川で健康寿命日本一を６年先くらいには実現したいと考えている。

質問を終えて▶▶

「絶好調！」。黒岩祐治知事はあいさつでこのフレーズを繰り返し、表情は意欲に満ちている。県内に３つの特区が指定され、ライフワークともいえる医療分野で「ヘルスケア・ニューフロンティア」という神奈川モデルが進んでいることに手応えを感じているようだ。米国、シンガポールなど海外でこの取り組みを発信する「都市外交」にも熱心だが、県民に「未病」などの概念が浸透しているとはまだ言い難い。重厚長大型の産業構造からの転換が求められるなか、医療関連が新たな産業の柱となるのか。知事就任１期目の最後にかけてエンジンがかかってきたこの取り組みを進めるには、もう１期の時間が必要かもしれない。　（横浜支局　**井上　孝之**）

禁複製・無断転載